
漆黒の勇者 トリシャナ

闇黒の守護者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒の勇者 トリシャナ

【Nコード】

N6367R

【作者名】

闇黒の守護者

【あらすじ】

私の名前は…レイン・モカ

私は伝説とか…物語とか全然信じない…

だってそんなのあるわけがない、あり得ないことですよ？

人生とかもどうでもいいし…

平凡にめだたないように暮らしていけばいいと思う…。

でもそんな私でも好きなものはあった。

動物…。私とは違ってずっとがんばっているから

うらやましいんだよね

そんなときさ

猫をかばって死んだんだ…

死んだ…ハズだった…。

記憶の断片

『あぶない!!』

ドンッ

何が…起きたんだろう…？

体がとても軽い…ああ私は…死んだんだ…

あれ？死んだって分かったってなんでつらくないんだろ？

別に人生そんなにいいもんじゃなかったし…別に死んだっていいよね…？

視界がうすれていく中で、私は死んだことを後悔していなかった…。

どうも闇黒です…。

初の作品です…。コメントとかいただけたら嬉しいな…。

目覚めた場所

『ここは…どこ？』

ぼやける中見えたのは…銅像？

（そつえば死んだんだっけ？

うつ頭が痛い）

一気に視界がガラッと変わった。

何ここ…落ち着け…私は死んだの…

・・・じゃあ此処は天国トカ？

ガヤガヤ

でもうるさいし…

酒臭い……………

「ヒィック よお嬢ちゃん、目え覚めたかあ？」

……………！！？

何こいつ…。体…頭犬で…体人間だよお？

人間じゃない…

「おいおい黙り込むなよお…ヒイック」

酒臭い…私地獄行き…？

「おい！無視すんなつての！！切れるぞおヒイック」

『ぐぐぐごめんなさい…』

「許しといてやるよおー僕ってやつしいー」

『ありがとう…あの一体どなた？』

「おいおいー人にももの聞くなりまず自分から名乗れえって知ってるけどさあー」

知ってるのかよ！でも言つといたほうがいいよねえ？

『私は。レイン・モ力です 高校2年デス』

「うん知ってるよおーあつ酔いさめてきたあ僕はね？犬^{けん}って言うの
^^」

…一体どうなってるの？ そのまんまだし…

「君はねえー、このトリシャナの姫になるんだよおー」

『はあ！？一体どういう…』

「言つた通りだよお？君は猫を助けたよね？ここはトリシャナ君た

「ちの言う動物の世界さあ」

『意味が…分かんない…』

「うん、仕方ないことさ！死んだと思ったら此処にいたんだよねえ
ー」

そう…その通りなの…信じられない…生きてるじゃん…動いてる
もん…

「意味分かんないと思うけど仕方ないことなの…。君が助けた猫は
…国王だったんだ」

『こく…おう…』

「そう、国王^^」

『助けたぐらいでこんなところの姫になるわけないじゃん 元の世
界に戻して！』

「そうはいかないんだよねー、君は…ここの国の後継者なんだあー」

『へんなこと言わないで！私は…私は…ハアハア』

「落ち着いてとにかく国王のもとへ行こうよ」

私はこの後起きる最悪な事態が来ることをまだ知らなかった…

最悪の運命

ケン「とにかく国王のもとへいこうよ」

っなんて言われていけるわけねえだろっ！

『でも。私は死んだはずじゃ・・・とにかく説明してよ！』

猫が押している車にのりながら私は怒鳴った・・・。

ケン「もおおっきい声ださないでよー」

『だったらさっさと説明してよね！』

ケン「それが・・・僕もよく知らないもんっ」

『可愛こぶったってそうはいかないわよ！さっさと白状しなさいよ
おーＴハＴ』

ケン「まあまあ泣くなってー」

『ないてへんわあほ！』

なぜか関西弁になった・・・。

ケン「とにかく国王が住むお城はもうすぐだよん」

『ぶう』

何なのよこの…犬とかいうやつ！一発ぶん殴ってやろうかしら

ケン「つきましたよー姫様ー（棒読み）」

『だから姫じゃないっての！とにかくその…国王とか言う人に
合わせろ！』

ケン「まあまあお待ちくださいーこっちでs」

一体何なのこのお城？ 猫がいっぱい… かつ可愛い…／／／

ケン「ひゃう」

『なっなに！…！？』

後ろにいたのは…かわいい犬…。

？「ああもとに戻っちゃった…せつかく人間に変身してたのにい」

『もしかして…ケン？』

ケン「はいぢつわさっきのかつこいい男の子は…僕ですよーいぬだ
ったんです」

『はあ！？お前人間じゃなかったわよ』

ケン「ええ！？人間でしたよー」

こいつ…頭がいぬだったことに気づいてないし…。

でもこっちのほうのケンは…かわいい／＼

ケン「国王の部屋はこっちです」

？「よくきたね あなたは僕の恩人だ^^」

「あなたが…国王…。」

王「そうです^^あなたが僕を助けてくれなかったら僕は…世界は…死んでいた…」

「…」

王「とにかく単刀直入にいまsここの後継者、姫になってください」

「いやだ…！元の世界に戻してよ！」

王「それわ無理ですあなたは死んだ…。」

「だって…だって動いてるし…感覚もある…」

王「信じがたいのは分かりますでも、それがあなたの運命」

『いやだよ…。とにかく…ちゃんと説明…してよ…。』

王「そうですねだったら話しましょう」

それから長く話は続いた…。

『だいたい…分かったかな？言いたいことは…』

私が死んで…あなたが助けてくれたのね？それであなたは動けなくなってしまった…だから

ここに現れる敵を封じていた魔法が解けてしまったのね？それをわたしが引き継いで…ほしいうていう』

王「そういうことですよ…。封じることができなくとも…。あなたがその姿で…人間の姿で倒してほし　い」

倒す…？意味わかんない…。

最悪の運命（後書き）

どうも闇黒です

なんだか意味わかんない展開になってきました…。

作者の闇黒も意味分かりませんw

だい4話のタイトルは…『敵の襲撃』です

（ 艸、ド、ゾ ）（っ、 、 ）（っ）（ヨロチク

敵の襲撃

あの話から2時間、私は自分の部屋をもらい、ベッドで考え事をしていた。

もちろん、この王国の姫になるはなし…。

姫って戦うものなのだろうか。

意味わからないこの世界でただ分かったことは、『にげられない』
ってことだけだ。

コンコン

だれかきたようだ、今の私は誰かとしゃべりたい気分ではない

「ごめん、あとにして」

そういうと、いきなりドアが開いた。

「ちょっとあとにしてっていつてるじゃん」

ケン「すいません、この後大事な話があると、国王が」

「わかったわ、案内して」

ケン「はい、お姫様」

言われると、初めて実感する、私は姫なんだ。

王「話があるんだ」

「なんのお話？私は今ちよつと」

王「君に特殊な魔法がかかっているんだ、君の体からしつぽが見えているよ？」

「ん？　！？」

王「そうだよ、君は人間から猫になりかけているんだ、ここにいるほとんどの動物は、死んだ人間の生まれ変わりなのだ」

「そんなつどうしたら・・・人間のままでありたいよ……。どうにかしてよ！！」

王「その魔法を解くには、ただひとつ」

「なに？なんなの？」

王「姫になって魔力の増加しかない。」

「……………」

王「ねっだからもう君は猫になるか、姫になるかしか方法は。」

「…して…」

王「？」

「…いい加減にしてよ！何で私にそんなこと押し付けるのよ！私になにしたって言うの？

ただあなたをたすけただけじゃない…。私のこと感謝してくれるなら元の場所にもどしてよ」

王「それは…」

ガタガタガタガタ

「地震？すごい揺れ」

王「ちがう敵の襲撃だ！はやく逃げなさい！！ケンを連れて行け！」

「王は？はやく一緒に」

王「私はやるべきことがのこっている…。早くいきなさい！」

ケン「姫様行きましょう！」

「でっでも！」

王「うっはやく…いきなさい…」

ケン「王様やはり魔力が足りなすぎます、逃げましょう」

王「言うことを聞け！早く姫をつれてお逃げしろ！」

ケン「っ…姫逃げますよ」

ケンハ私をそりのようなものにのせて、走り出した

「魔力って？なんなのいったい」

走っているケンに向かって話しかけた

ケン「王様はあなたをこの世界に連れてくることで…。魔力をなくした」

「魔力…？」

ケン「そうです、だから国王様にはもう…逃げる力が残っていない・
・」

「キャッ」

いきなり落ちてきた大きな石・・・私めがけて一直線だ

ケン「姫様！」

ガンッ

すごい音だ…一体なにがおきているんだ？

ケン「姫さm…逃げてください…」

そこには血だらけのケンの姿があった。ただの犬では死んでいる
はずだがやはりそこは、魔力のせいなのだろうか

「やめて！一人にしないで…また一人ぼっちになるのわいやなの！
お願い一人にしないでえええ」

レインの過去

十年前…。

『おかあさん、おとおさん！遊んで？』

母「今忙しいの、あっちに行つといて」

父「もう！一人で遊んでいなさい！！」

『・・・・・・・・・・・・・・・・』

そう私はずっと一人だった…。でも親がいるだけでまだ幸せなのだと
思えた。

学校でもずっと一人。もう何日人と話していないのだろう。

母「もう！レインはまだ帰ってこないの？」

父「レインがこうなったのも、お前が相手をしてやらないからだろ
う」

母「何だって言うの？私のせいだって言いたいのか！？」

父「ああもう！うるさい！仕事に集中できないから静かにしろ！」

母「私だって仕事しているのよ？家事は女がやるなんて、古いわ！」

ずっとこんな会話ばかり。私はそれでも我慢した。

でも、あの日は何か違っていた。

母「レイン、今日は楽しみにしていなさいね」

父「待っていなさい、面白いことがあるぞ？」

『うん！』

私はお父さんとお母さんが楽しそうに話しているのを見た。
ボソボソなにか話事をしていた。

母「今日はレインの誕生日、今まであの子にはガマンさせ続けたわ」

父「ああ、これからは親子で仲良く行こうじゃないか」

その話を聞いたとき、私はココロからうれしくなった。

そつえばキヨウは私の誕生日だったんだ。

8歳の誕生日…。

『お母さん遅いなあ？』

もう時計の針は5時をさしている。いつもならご飯の支度をしている時間なのに。

トゥルルル トゥルルル

電話だ！ 誰だろう？

『ハイ、モ力ですが？』

警察「警察です！レイン・モ力様ですか？」

『はいそうですが？』

一生懸命敬語を使った。

警察「あなたのご両親は事故に巻き込まれました」

『えっ…？』

なにを言っているのか、理解するのに時間がかかった。

その後の警察の話でわ。お母さんとお父さんは、プレゼントを買って帰ろうとしたときに

車が飛び出したきて死んでしまったらしい。

『…。』

病院につくと、白くなった姿があった。

なぜだろう？涙が出ない…。

ああきつと、理解できていなかったのだろう。

『いやあああああつあああああ』

叫んだときにはもう意識をなくしていた。

おきたときにはもう朝、私は病院のベッドで寝ていた。

医師「これあなたに買ってあげてた、プレゼントよ」

渡されたのは大好きなクマのぬいぐるみ。

でももってくれた人はいない、ずっと育ててくれた人はいないんだ

『いやっ…一人にしないで…いやあ…』

先生は、何も言わずに抱きしめてくれた。

その後私は施設に入れられた。そこでも友達ができなかった。

一人で孤立してた。

そうして十年がたったの。

『いやっもう一人にしないでええ』

レインの過去（後書き）

どうも暗黒です。

結構な展開になってきましたね。

コメントとかも一度も来ていないので、

だれかかいてください（*・ω・*）*———）（

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6367r/>

漆黒の勇者 トリシャナ

2011年10月8日22時07分発行